



追手門学院大学
笑学研究所年報

第 2 号



2016 年度
追手門学院大学笑学研究所

目 次

笑学研究所の思い出 ～去るにあたって～	井上 宏	1
井上宏初代所長のご退任にあたって	高垣 伸博	3

講演録

第2回笑学研究所公開講座

笑いの心理学		
－関西人はなぜ笑う？－	浦 光博	5
大阪の笑いと文化	広瀬 依子	17
関西の笑い		
－パネルディスカッション－	藤田 曜・浦 光博・広瀬依子・横田 修	23

調査報告

追手門学院大学生の「笑い」に関する調査・中間報告	高垣 伸博	33
2016年度笑学研究所活動記録		41
2016年度笑学研究所所員および研究員一覧		42
追手門学院大学笑学研究所規程		



笑学研究所の思い出 ～去るにあたって～

笑学研究所前所長 井 上 宏

追手門学院大学に、我が国初めての「笑学研究所」が設立されて、1年と半年が経ちました。所長として1年、特別顧問として半年の間、お世話になりました。私の仕事は、研究所の基礎を築いてレールを敷くことでした。スタート時は、私を含めて所員5名、特別顧問1人の合計6人のスタッフでしたが、翌年には所員1名が加わり、3名の客員研究員の参加も得ることができました。

アツという間の短い時間でしたが、私にとっては、大きな思い出が残りました。1994年に「日本笑い学会」を設立してから以降、私は大学に「笑い学」の研究所ができないものかと期待していました。それが追手門学院大学で実現し、その初代所長に招かれたのですから、私にとっては誠に光栄なことであり、大きな喜びでありました。

研究所のスタートは、2015年10月1日ですが、その構想については、大学50周年記念事業の一環でもあり、周到に準備は進んでいたと思います。私が大学側のスタッフとお会いした最初は2014年の9月のことでした。それ以来、何度かお会いし、坂井東洋男学長とも話を交わさせていただきました。学長のお話の中で、「ユーモアのある人間を育てたい」という強い言葉がありました。その手始めが「笑学研究所」の設立なのだったということでした。全国数ある大学で「笑学」の必要性を説かれた学長は、おそらく坂井学長が初めてではないかと思ひ共感を覚えました。

所長を引き受けるには、年を取りすぎていること、自宅が遠方であることなど、辞退する選択もあったのですが、学長の教育理念に共感し、私のこれまでの知識と経験が役立つものならばと、初代所長を引き受けることにしました。

研究所のスタートは、準備段階で、事務局が大変だったわけですが、所員の任命や設立の記者会見、設立記念シンポジウムや第1回公開講座の開催など、立て続けに仕事が山積していました。事務局の皆様には、大変お世話になり、あらためてお礼を申し上げる次第です。

2015年の記者会見には、追手門学院大学のキャラクターと通天閣の「ビリケンさん」の着ぐるみの登場があって、型破りの記者会見になったのではないかと思います。大勢の記者会見場は、会見によくある緊張というよりも、和らいだ空気に満たされ、和やかな記者会見となりました。

年が明けて2016年の1月4日、大学50周年事業の一環としての「新聞全面広告」が出ました。私はこの新聞広告に驚き且つ賞賛の念を禁じえませんでした。事前に「ビリケンさん」を「笑学研究所名誉所長」にしたいという意向を伺ってはいましたが、私は新聞コピーを見ていなかったもので、どういう意味なのか判然としないうでしたが、新聞を見て、こういうことだったのかと納得

しました。そして同時に「これはすごい！」と驚嘆せざるをえませんでした。

「笑学研究所名誉所長にビリケン就任！」というコピーもさりながら、メインコピーの「大阪に幸あれ、笑いあれ。ずっと大阪 50 年。追手門学院大学」の言葉は、大阪人の心に響いたと思います。「大阪に幸あれ、笑いあれ」の一言が優れものでした。ビリケンさんの「名誉所長」も納得でした。

2016 年 2 月 29 日、第 1 回公開講座が開催されました。私が講師をつとめ、笑学研究所の第 1 回目で、どんなことが語られるのかという興味も手伝ったと思われますが、定員を越えての申込があってお断りをするという事態も起こりました。嬉しい悲鳴でした。

4 月に入って、授業で初めての「笑学入門」がスタートしました。大学の初めての講義科目で、どれだけの学生が履修してくれるのか、という心配がありましたが、蓋を空けてみると、定員を遥かにオーバーする履修届が出て、抽選によって履修生を決めなければならないという、これまた嬉しい悲鳴を聞くことになりました。「笑学」についての物珍しさもあったと思いますが、開講に寄せた学生たちの新鮮な想いを大事にしなければと思った次第です。「笑学」への期待は大きいのだということを、研究所員一同、認識を新たにすると感じました。

「笑学研究」は、幅広く言えば、「人間学」の一つで、一つの専門領域でカバー出来るものではなく、まさに総合的な研究が要請される学問と言えます。研究スタッフも、そう言う意味で、多様な領域の研究者が集まっており、「笑いとユーモア」という鉱脈を探索し、錯綜する鉱脈のつながりとその核心を探っていただけたらと願っています。

研究所は、その研究成果を出す必要があります。それは講義であり、講演であり論文でありするわけですが、研究所としては、それらを論文化し出版し、内外に発表しなければなりません。私は折ある毎に、所員の皆さんに「論文を！」と言い続けていました。まずは「論文を溜めよう」ということは、共通の目標になったと思います。

いよいよこれから本腰を入れてという時に、研究所を去るのは、とても残念な気もしますが、高齢の身では、助走がついたこの段階で、若い研究者の方々にバトンタッチするのが賢明な判断ではないかと考えました。

坂井学長をはじめ、研究所の先生方、事務方の皆さんに大変お世話になりました。短い期間ではありましたが、充実した時間を過ごさせていただいたことに深く感謝申し上げる次第です。

2017 年 3 月 31 日

井上宏初代所長のご退任にあたって

笑学研究所所長 高 垣 伸 博

2015 年 4 月、私が前職（毎日放送）を退職して本学に奉職したときには、すでに「笑学研究所」設立に向けての準備は着々と進んでいました。そして所長が井上宏先生であることもお聞きしていました。

その年の夏を迎えるころだったでしょうか、大阪城スクエアの会議室でおよそ 15 年ぶりに井上先生に再会したのです。というのも、井上先生が上方演芸資料館（ワッハ上方）の館長をされていたときに（1999 年から 3 年間）、私は在阪放送局の資料部会委員を大阪府から委嘱されており、資料部会で何度かお目にかかっていたのです。

無沙汰の挨拶もそこそこに、笑学研究所設立に向けた打ち合わせをしてから早や 2 年が経過しようとしています。

井上先生は読売テレビ時代に編成マンとして「上方お笑い大賞」創設に関われ、また退社後、関西大学教員になられた後の 1994 年に「日本笑い学会」を創設、初代会長として「笑い学」を提唱、「笑い」研究の第 1 人者であることは言うまでもありません。

副所長である私は、放送マンそして大学教員の大先輩である井上先生の背中を追いつつも何もできないまま、いたずらに時を過ごしてしまいました。

先生はご自分が関西大学在職中に果しえなかった「日本の大学で初めての笑いの研究所」が追手門学院大学にできたことを心底喜んでくださり、広報マンのごとく学外でも事あるごとに「笑学研究所」を PR してくださって、所長というお立場だけではなく、心から研究所のことを考えてくださっていたことは、常々お話しの方から感じ取ることができました。

研究所定例会議の度に、先生の経験談や今後進むべき研究所の方向性の話など、熱い思いを語ってくださり、ときには所員に叱咤激励をされるのですが、先生の思うように反応しない我々に歯がゆい思いをされたことと、今さらながら申し訳ないこととお詫び申し上げる次第です。

そんな我々を見捨てることもなく、三重県名張というご遠方から毎月会議にお越しくくださり、1 年半もお付き合ひいただきことを心から感謝申し上げます。

所長を引き継いだ私も当然ながら、所員の面々も井上宏初代所長の名を汚さぬよう精進してゆく所存ですので、ご退任されたとは言え今後ともご指導ご鞭撻をお願いいたしますとともに、井上先生も今後ますますお元気で活躍されんことをお祈り申し上げます。

井上宏先生、本当にお世話になりました。そして、ありがとうございました。

笑いの心理学 －関西人はなぜ笑う？－

講師：追手門学院大学笑学研究所所員 浦 光博

はじめに

ただ今ご紹介いただきました、追手門学院大学笑学研究所の所員の浦でございます。

私は、心理学部の教員でもありまして、当然のことながら、心理学を研究しています。今日のメインタイトルが「関西の笑い」ということですので、関西人はなぜ笑うのかというお話を心理学の立場からさせていただきたいと思っております。

笑学研究所は言うまでもなく研究所ですので、何か研究をしないわけにはいかないのですが、だいたい笑いというものを研究してしまいますと、面白くないことが多いですね。ある方がこんなことを言っていました。笑いを研究するなんていうのは、カエルの解剖のようなものだ。第一、そんなものは見たくもないし、カエルが死んでしまう、ということです。つまり、研究をすればするほど、面白くなってしまうんですね。ですから、私の話にあまり面白さを期待しないで下さい。その分、最後に横田先生がどっと笑わせてくれますので。

ちょっと退屈かもしれませんが、しばらくお付き合いいただければと思います。

早速ですが、ちょっと堅そうな話から始めます。ソクラテスという古代ギリシャの哲学者のことです。彼は哲学者としてとても有名な方なのですが、もう1つ有名なのは、奥さんが悪妻だったということです。とにかくソクラテスの奥さんは怖い人だったらしいのです。クサンティッペという名前の女性で、金にならん哲学みたいなものばかりしやがってと、夫のことをぼろくそ言っていたらしいです。この話が本当かどうか、いろいろ諸説あるのですが、一応、悪妻の夫であるということでも、とても有名な方です。

それとともに、この人はとても面白い人だったらしいですね。ユーモラスで、ジョークを飛ばして、絶妙な掛け合いで人を笑わせながら哲学を説いた方であったということです。

このソクラテスが面白いことを言っています。「結婚はしておいたほうがいい。もし、良妻なら幸せになれるし、悪妻なら哲学者になれる」と言っていたとのこと。これも本当かどうかはわかりません。後から付け足すということはよくあるので。何せ、紀元前の話ですからね。実際のと



ころは、どうなのかはわかりませんが、ソクラテスが面白い方だったというのはどうやら本当のことのようです。とは言え、実は、彼自身は笑いについて何かまとまった考えを残しているわけではないようです。

人はなぜ笑うのか

今日のテーマは「関西人はなぜ笑うのか」です。話をそこに進める前に、そもそも「人はなぜ笑うのか」を考えてみたいと思います。このことについては、これまでさまざまな研究が行われています。

笑いについての研究というと、「笑い学」と言っているのかどうかはわかりませんが、その祖と呼ばれているのが、先ほどのソクラテスの孫弟子、アリストテレスだそうです。彼は哲学者として知られていますが、「万学の祖」とも言われていまして、非常に多くの領域の研究をされた方だそうです。特に有名なのが、哲学とともに、動物学です。いろんな動物を観察して、その生態を分類して体系づけるということについて、随分と良いお仕事をされたそうです。

私自身は、べつに哲学者でも何でもないので、その内容を知っているわけではないのですが、動物をいろいろと観察をして体系化していく中で、このようなことを言っています。「笑うのは人間だけである」ということをアリストテレスは言ったそうです。

この言葉だけではなくて、それ以降、笑いに関していろんなことを述べています。特に、後からちょっと触れますけれども、今で言うところの優位理論的な観点から笑いについて論じています。これは、人は自分よりも劣っているものを見ると笑うという考え方です。そういったところから、人によっては、この方を「笑い学の祖」と言う方もいらっしゃるようです。

ただ、この笑うのは人間だけであるというのが、果たして本当にそうか、ということについて、いろいろ疑問も出されています。私自身も本当かなと思うところがあります。例えばこのチンパンジーをご覧下さい（図1）。いかにも笑っていますよね。チンパンジーは人間に近い霊長類ですから、チンパンジーも笑うのかもしれないなと思うかもしれませんが、これはどうでしょう（図2）。どう見ても笑っていますよね、ネコも笑う。じゃあ、イヌはどうか（図3）。イヌもやっぱり笑っているようにしか見えない。



図1 笑っているように見える
チンパンジー



図2 笑っているように見える
ネコ



図3 笑っているように見える
イヌ

果たして本当に笑い学の祖のアリストテレスが言ったように、笑うのは人間だけなのか。それとも、もともとこういう動物のこの表情というものが、人間の笑いのルーツなのか。進化的に考えれば、もしかしたらそうかもしれませんね。

これは、そもそも笑いとは何かという定義の問題でもあるだろうと思います。これら動物の表情を笑いと言ってしまえば、動物も笑うということになるし、いや、これは人間の笑いとは違うんだと言ってしまえば、笑うのは人間だけということになります。

要するに何を言いたいかというと、笑いそのものが非常に定義も曖昧ですし、哲学者が言う笑いと心理学者が言う笑いと社会学者が言う笑いとでは、それぞれに違うかもしれません。そういった意味で、研究という観点から考えますと、笑いというのはとても一筋縄ではいかないテーマなんです。

また、笑いとユーモアとは同じかという問題もあります。先ほど見たチンパンジーは笑っているように見えるし、ネコもイヌも笑っているように見えます。たとえあれを笑いだと考えても、おそらくチンパンジーにも、ネコにも、イヌにもユーモアはないと思うんですよ。ジョークを連発するチンパンジーには会ったことがないですからね。そういった意味では、おそらく笑いとユーモアには共通部分もあれば、違う部分もある。進化論的に見れば、チンパンジーなんかが持っているあの表情というものは、おそらくわれわれ人間にもあるだろう。そこに、人間独自の知性というものが上に乗って、ユーモアというものが出来上がったのではないかと考えられますね。

他にも、デュシェンヌの笑いと非デュシェンヌの笑いというのがあります。デュシェンヌというのは人の名前です。そしてデュシェンヌの笑いとは何かというと、心から面白くて、おかしくて笑うというもの。そして、非デュシェンヌの笑いとは何かといいますと、愛想笑いとか、追従笑いとか、あるいは、べつにお愛想でも追従でもなく、人と人がすれ違うときに、ニコッと笑いながら「こんにちは」と言うような、いわゆる社交的な、人間関係をつくっていくために、おかしくもなく笑うということを非デュシェンヌの笑いと呼びます。これらデュシェンヌの笑いと非デュシェンヌの笑いというのは果たして同じなのか、違うのか。同じであるならば、どの部分が同じなのか。これも心理学上、非常に重要な問題ですが、なかなか解決の難しい問題です。



さらに例を挙げれば、ちょっと卑しい笑いです。「シャーデンフロイデ」というものです。ドイツ語らしいです。これは何かというと、「人の不幸は蜜の味」というようなものです。嫌いな人が転んだらおかしいとか、有名人が変なことをしたら、クスクスッと笑うとか、こういう人の不幸は蜜の味というような笑いのことを「シャーデンフロイデ」と言います。よく、笑うと健康になるとか、笑うと免疫力が高まると言われますが、シャーデンフロイデで免疫力が高まったら、あまり愉快な世の中にはならないように思いますね。

笑い、ユーモア、デュシェンヌ、非デュシェンヌ、シャーデンフロイデ。ここに挙げただけで5つの笑いがある。これは、みんな同じなのか、違うのか。同じであるとするならば、ルーツはどこなのか。なかなかこれは一筋縄ではいかない。

表1 代表的なユーモア理論

生物学的理論
遊戯理論
優位理論
解放理論
不一致と不一致解決理論
驚き理論
機械的ユーモア理論

それでも、研究者はいろいろと、これらを統一的に説明したいということで、さまざまな理論が提唱されています。表1は、『ヒトはなぜ笑うのか ユーモアが存在する理由』という本に挙げられているユーモア理論です。先ほど出てきた、生物学的な笑いについての理論。遊戯理論。遊ぶ子どもは笑いますよね。そこに人間の笑いのルーツがあるんじゃないかというものです。先ほど言ったアリストテレスの考え方は優位理論です。優位に立った

人間が、劣位にある対象を見て笑うというもの。次の解放理論については後から触れます。最近はやりの理論が解放理論とか、不一致と不一致解決理論です。これらは、心理学者がわりと好きな理論です。他にも、驚き理論とか、機械的ユーモア理論。もうこうなってくると、何を書いているのがよくわからない。

これほど笑いの種類も多様であれば、あるいは笑いとはユーモアがどう違うのかということも難問ですし、それをさまざまな研究者がさまざまな立場から、あれこれと言っている。つまり、どうも、これという統一理論がないんですね。でも、実は統一理論ができてしまうと、われわれは困るんです。もうそれ以上研究することがなくなりますから。統一理論がなくてよかった。おかげで、いろいろと好き勝手な理論を提唱して研究を続けることができますから。

ただ、統一理論はないものの、緩やかな共通点は、どうもありそうです。何かといいますと、脅威とか緊張、あるいはちょっとした心の引っ掛かりですね。言い換えれば、違和感。まずそれがあって、そういったものが解放される。あるいは、違和感が緩和される。そこに笑いが生まれるというものです。人をちょっと緊張させたり、違和感を覚えさせたりして、それをフワッと解放させてやる。そこに笑いが生じる。というようなことは、どうやらさまざまな理論で共通している部分のように思います。

こういった観点に立ったときに、この方のことを私は思い出します。桂枝雀さんです。亡くなられましたけれども。彼は、賢かったですね。彼の笑いの理論があるんです。笑いというのは、緊張の緩和であると常々おっしゃっていました。



私は枝雀さんの落語が好きで、生前はよく落語会に足を運びました。「笑い転げる」という言葉がございすね。いくら何でも笑って転げ回らんだろうと思っていたら、お客がほんまに転げ回っていましたからね。枝雀さんが落語をすると、椅子に座っている人が笑い過ぎて転げ落ちるんです。それぐらい面白かった。

枝雀さんもこんなことをおっしゃっていたし、さまざまな研究者も、どうやら共通項として脅威とか緊張、違和感、そういったものから解放されたときに、人は大笑いをするともあれば、クスッと笑うこともある。どうやらここに笑いというもののルーツがありそうだということは、緩やかな形で研究者が共有しているところかなと思います。

心の余裕と笑い

そう考えたときに、どんな人がよく笑うのかということが心理学者としては気になる。今も言いましたように、脅威や緊張からの解放とか、あるいは緩和。こういったものが笑いの条件だとすると、やっぱり嫌なことが起こったとき、緊張することが起こったとき、脅威が起こったときに、それをポーンと突き放すことのできる心の余裕のある人の方が良く笑うのではないかと考えることができます。逆に、何か追い詰められて、毎日生きるのが大変だという人は、笑っている暇はないと思うんですね。でも、追い詰められても、ちょっと心に余裕があって、それを客観的に見ることができる人は、きっと追い詰められているだけの人、心に余裕がない人と比べると、よく笑うんじゃないかということが考えられます。つまり、心に余裕のある人は、ない人よりもよく笑うんじゃないかなというのが1つの仮説として浮かび上がります。

では、ここで言う心の余裕って、何でしょう。心理学者なんだから、心の余裕とは何かという問いぐらいにはスパッと答えろと言われるかもしれませんが、実はなかなか難しいんですね。そもそも、心とは何かという問題が実は難しい。私は心理学の勉強をし始めてもう40年経ちますが、いまだかつて、一度も心を見たことがないんです。皆さんは心を見たことがありますか。どんな形をしていますか。そもそもどこにあるんでしょう。どんな色をして、どんな形で、どんな香りで、どれぐらいの重さなのか、見たことがないですね。その見たこともないものを研究しているのが心理学者です。

それでも、われわれ心理学者というのは、データがないとものと言えないというちょっと悲しい習性がありますので、その目に見えない心の余裕を何とか目に見える形で捉えてデータをとろうと思ったわけです。そこで、とてもわかりやすい心の余裕を今回は2つ扱いました。1つはお金、年収です。金持ちは余裕があります。金持ちはけんかをしない。心に余裕があるからです。逆に余裕がない人というのはどんな人なのか。もちろんお金持ちに余裕があるとすれば、お金持ちでない人は余裕がないということになりますが、それだったらあまり面白くないので、今回は余裕の無さを孤独感として捉えました。孤独な人って、あまり笑いそうにないですよ。笑っていたら、何と



なく怖いですね。

こういった観点からデータを採って見たのです。そのお話を今から少し、堅いお話になりますけれども、お聞きいただきたいと思っています。

実証的研究 (1) 一心に余裕のある人はよく笑うか？

実証的研究 (1) です。「心に余裕のある人はよく笑うか」というテーマです。経済力と対人関係の2つの観点から心の余裕を捉えました。経済力というのは年収です。対人関係というのは孤独かどうかです。それと、楽観性も一応押さえとして測定しました。当たり前といえば当たり前なのですが、楽観的な人はよく笑うということです。

経済的な余裕については、それを世帯収入として捉えるのか、個々人の収入として捉えるのかという、ちょっと厄介な問題があります。心理学的には、さまざまなものに関連するのは世帯収入の方だということが分かっています。自分が個人としてお金をどれくらい稼いでいるかではなく、家族全体としてどれくらいお金を稼いでいるかというのが、さまざまな心理的な現象に効きやすいということが分かっているのです、今回も世帯収入を使いました。

対象は、全国47都道府県の20代から80代の男女600名です。男女各300名ずつからデータをいただきました。

笑いについては、過去2カ月の間に笑うこと、大笑いすることがどれくらいあったかを答えていただきました。そのような経験が、「まったくなかった」から「とてもたくさんあった」までの5段階で回答してもらいました。これを笑い経験としました。次に、ユーモア経験についても問いました。同じく過去2カ月の間にユーモラスな気分になることなどがどれくらいあったか。「まったくなかった」から「とてもたくさんあった」までの5段階です。高得点ほどよく笑い、あるいは高得点ほどユーモラスな経験になることが多かったというように数値化しています。

まず全国の600名全部のデータを分析したところ、こんな結果でした(表2)。星印が付いているのが、統計的に関係があるということを意味します。星印が付いていないのは、全然関係ない。つまり、笑うとかユーモア経験は年齢に関係なく、若者であろうと、高齢者であろうと笑うという

表2 世帯収入、孤独感、楽観生徒笑い経験、ユーモア経験との関連(全国のデータ)

変数名	笑い経験	ユーモア 経験
世帯年収2	.109**	.113**
孤独感	-.190**	-.208**
楽観性	.344**	.239**
性別	.199**	.107**
年齢	-.059	-.009
R^2	.311**	.212**

**p<.01



表3 世帯収入、孤独感、楽観生徒笑い経験、ユーモア経験との関連（関西のデータ）

変数名	笑い経験	ユーモア 経験
世帯年収2	.020	-.027
孤独感	-.024	-.076
楽観性	.582**	.447**
性別	.205**	.158†
年齢	-.139†	-.087
R^2	.376**	.256**

**p<.01, †p<.10

ことが分かります。星印が付いているのが、統計的に意味のある関係とご理解ください。数字の前にマイナスが付いているのは、逆を意味します。ちょっと比喩的に言えば、反比例みたいなものだと考えてください。マイナスの付いていないのが、正比例のようなものです。

この結果が何を意味しているかということ、まず、やはり世帯収入が効いてきます。お金持ちほどよく笑うし、ユーモア経験も多いということです。そして、孤独感にはマイナスが付いていますから、孤独な人ほど笑わないし、ユーモラスな気分になることも少ない。楽観的な人は、よく笑う。当たり前といえば、当たり前ですね。この結果は、私たちの直感的な理解や経験によく一致する結果だと思います。楽観的な人ほどよく笑うし、世帯収入の高い人ほどよく笑うし、孤独な人ほど笑わないということです。

では、関西はどうだろうかということで、関西に住む人たちのデータだけを取り出して、同じ分析をしてみました。どこまでを関西に入れるのかが、なかなか難しいところですが、今回は滋賀、京都、兵庫、大阪、奈良、和歌山。この6府県を関西圏としました。

この関西圏に住む人たちだけのデータを取り出して、同じ分析をしてみたところ表3の結果になりました。ご覧のとおり、世帯収入についていた星が消えていますよね。孤独感についていた星も消えています。これは、関西人は金持ちであろうと、貧しい人であろうと、笑う。さみしい人であろうと、さみしくない人であろうと、笑うことを意味しています。この結果は、関西人の笑いには独特の何かがあるんじゃないかなということを示唆しています。

実証研究（2）－関西人はなぜ笑う？

そうすると、やっぱり関西人は何で笑うのかと。金持ちでもないのに。もちろん、貧しい人が笑っちゃいけないということではありません。でも、全国的な傾向としては、経済的に貧しい人よりも豊かな人のほうがよく笑い、ユーモア経験も多いのに、関西では、経済的な豊かさの影響は見られない。孤独感についても同じことが言えます。全国のデータを見ると笑いやユーモアの経験に孤独感が関連するのに、関西では孤独かどうかにかかわらず笑う。これらは関西のとても良いところと言って良いのかもしれない。



これはもう心理学の範囲にとどまる話ではないですね。文化人類学とか社会学のテーマとしても捉えられると思うのです。あるいは、歴史学かもしれません。

いわゆる商都、商いの都の大阪。商売をスムーズにやるために、常に人との会話の中にユーモアをまぶして、ぎくしゃくしないようにする。そういう文化的ルーティンが関西にはあるのではないか。ルーティンというのは決まり切ったやり取りみたいなものです。結構シビアな経済的なやり取り、お金のやり取りというものに笑いをまぶして、クスッと笑わせて和ませよう、できる限り角が立たないようにしていこうというような、そういう文化というのが、大阪を中心とする関西圏にはあるのかもしれないということです。これはべつに心理学者のオリジナリティーでも何でもなくて、昔から言われていることです。

こういった観点から、もう一度違うデータを採ってみました。先ほどのデータとはまた別のデータですが、これも全国47都道府県、20代から80代の男女600名からデータをいただきました。

この調査では周囲の人々の特徴について聞きました。「あなたと日常的に付き合いのある周囲の人たちの中に、次のような人はどれぐらいいますか」という問いです。この問いに対して、「ほとんどいない」から「とても多い」までの5段階で答えていただきました。

大きく3種類の人たちのことを想定しました。温かな人たち、有能な人たち。そして、笑わせようとする人たちの3種類です。この3種類の人たちがどれぐらいいるのかを聞いたのですが、その時にずばり聞くのではなくて、複数の角度から聞いています。表4をご覧ください。まず、優しい人、親切な人、温かい人が1つのまとまりになります。こういった人たちが、あなたの周りにどれぐらいたくさんいますかという問いです。

2つ目が、何をやらせてもそつなくこなす人、仕事のできる人、勤勉な人。いわゆる有能な人のことです。このような人があなたの周りにまったくいませんか、たくさんいますかという問いで

表4 対人環境についての因子分析結果

項目	第1因子	第2因子	第3因子	共通性
優しさ因子				
優しい人が	1.001	-.072	-.039	.868
親切な人が	.844	.039	.002	.765
温かな人が	.748	.158	.027	.780
有能さ因子				
何をやらせてもそつなくこなす人が	-.125	.870	.070	.663
仕事のできる人が	.155	.671	-.002	.624
勤勉な人が	.251	.580	-.119	.536
ユーモラスさ因子				
ちょっとした会話でも、笑いをとろうとする人が	-.006	.003	.816	.664
何かにつけて話にオチをつけようとする人が	-.092	-.020	.809	.579
冗談好きな人が	.317	.043	.517	.569
因子寄与	4.084	3.588	2.646	
α係数	.921	.807	.790	
ω係数	.925	.816	.813	
因子間相関	第2因子	.730		
	第3因子	.487	.445	



す。

3つ目が、ちょっとした会話でも笑いを取ろうとする人が、何かにつけて話にオチを付けようとする人が、冗談好きな人が、それぞれあなたの周りにあまりいませんか、たくさんいますかという問いです。これらを合計しまして、温かな人、有能な人、笑わそうとする人のそれぞれが周りにたくさんいる人もいれば、そうじゃない人もいるということを数値化したわけです。

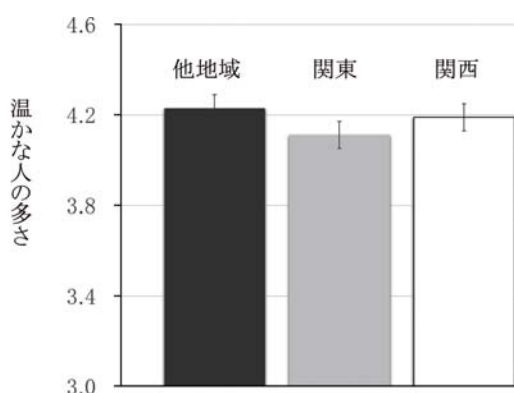


図4 地域別「温かさ人」の多さ

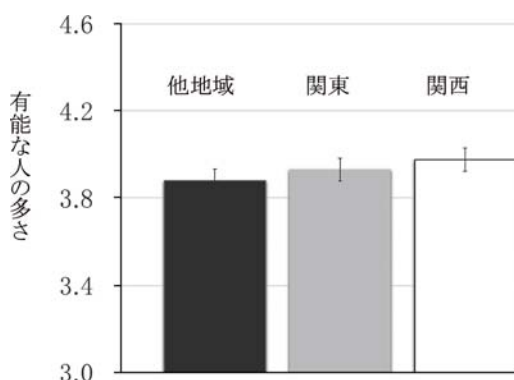


図5 地域別「有能な人」の多さ

これを関西と関東とそれ以外の地域に分けて分析してみました。図4をご覧ください。このグラフは、縦に行くほど温かな人が多いことを示しています。5点が最高点ですから、どの地域に住む人でも4.2前後の値になっているというのは、温かな人が周囲に結構いることを意味します。ちょっと関東が低いように見えますか。こういうのを見ると関西人は喜んでですね。関西人のほうが温かいとか、人情味があふれるとか言うのですが、これは誤差の範囲ですから、ほとんど意味がありません。ほぼ同じレベルに温かな人はいるということです。

なぜでしょうね、これは。関西人は関東のことをちょっとマイナスに言うとか、異様に喜びますよね。むしろ、関東に対するコンプレックスが丸出しになっているかと思ったりしないでもありませんが、少なくとも今回の結果を見る限り、どうやら温かな人の多さに地域差はなさそうです。

では、有能な人はどうか(図5)。これもちょっとだけ関西が多いように見えます。でも、これも、皆さん、喜んじゃいけません。誤差の範囲です。別の機会にデータを採れば、いくらでもひっくり返るぐらいの本当にわずかな差ですので、べつにこれだからといって、関西人が他の地域より有能とは言えません。有能な人の多さにも地域差はないということになりました。

さて、次です。もうそろそろオチがわかりますか。私は豊中生まれの豊中育ち、33歳までずっと豊中で過ごしてきました。大阪で生まれ育った人は、やっぱり厳しいところがあります。特に男の子。何をしゃべっても、しゃべり終えたと思っても、友だちがじいっと待っているんです。うん、うん。で？ で？って、何？。いや、オチは？って。オチを求められるんですね。特に男の子はそうして鍛えられる。鍛えられてもちゃんと育たない人もいれば、ちゃんと育つ人もいますけ

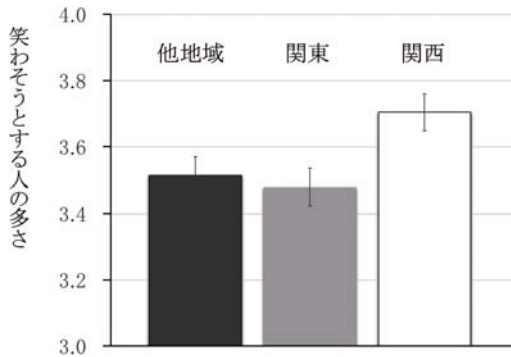


図6 地域別「他者を笑わそうとする人」の多さ

ど。

オチの話にいきましょう。笑わそうとする人の多さについての結果が図6に示されています。これは皆さんの期待にたがわない。やっぱり笑わそうとする人は関西が断トツに多いですね。これは誤差の範囲ではありません。同じ調査を何回繰り返しても、おそらくこういう形のグラフになる。どうやら、やっぱり関西というのは、笑わそうとする人が他の地域と比べて、少なくとも受け取る側の認識としては多いよう

に認識されている。

この結果について、さらに気になるところがあるかもしれませんね。この笑わそうとする人について、表4にあるように3種類の人を想定したわけですが、どのタイプが一番効いているかが気になるという人もいるかもしれません。これについても、皆さん、先ほどの話からお分かりですね。実は、一番効いているのは表4のユーモラス因子の2番目の項目です。何かにつけてオチを付けようとする人というのが、やっぱり他の地域と比べて圧倒的に多いというのが、もう少し詳しく分析をした結果です。

ちなみに、先ほど申し上げました関西の6府県で比較してみても、実は6府県の間には差はありません。ですから、商都大阪だけではなくて、関西圏内での笑わそうとする人の多さに関しては、おそらく地域差はないのではないかなと思います。

ここに関西人の笑いの特徴が出ているように思われます。お金持ちでも、貧しい人でも、孤独な人でも、孤独でない人でも、関西人は笑います。関西以外の地域はそうではないのに。

関西独特の言葉で「笑かしよんな」という言葉がありますよね。これらの分析結果は、関西にはそういう笑かす人が多いということを示しているようです。

言い方を変えれば、関西人の対人的な環境には、笑いが当たり前のようにあるということです。とすると、関西に住む人にとって笑いは空気みたいなものですよね。でも、関西の中でも周囲に笑いの少ない人もおそらくいるだろうと思うのです。私の周りにはそんなに人を笑わせる人はおらへんという人もいるだろうと思うのです。そうすると、当り前のものがないと、もしかしたら、つらいことが起こるのではないかというのが、次の予測として出てきました。これについても分析してみました。

その結果が図7です。縦軸が日常的に感じる快感情の程度です。愉快であったり、面白かったり、幸せだったり、そういう快感情を縦軸に取りました。上に行くほど、日々快適な感情で過ごしているということです。あなたの周りに笑わせる人が多いですか、少ないですかという問いに多いと答えた人たちは、実は関西でも、他の地域でも、快感情には差がない。やっぱり周りに自分を笑

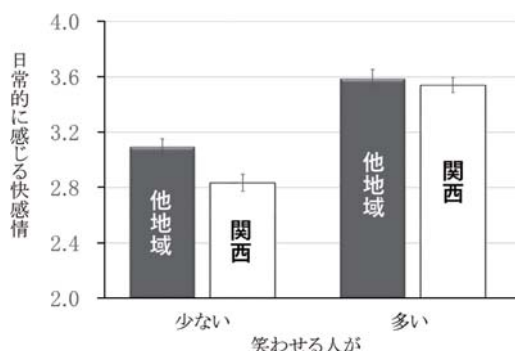


図7 笑わせる人の多寡と日常的に感じる快感情との関連の地域比較

わせてくれる人が多いと思っている人は、この地域に住んでいようと日々愉快地に過ごすことができるということがわかりました。

問題は、笑わせる人が少ないと思っている人です。関西では笑わせる人が周りに少ないと、他地域と比較して日常的に感じる快感情が低いのです。

要するに、関西人というのは、どちらかという、孤独感とか、お金持ちとかという自分が持っているもので人より多く笑うとか、笑わな

いとかというよりも、自分の周りの対人的な環境に影響されて笑ったり、笑わなかったりするようです。その笑ったり、笑わなかったりが、日々生活をしているときに日常的に感じるちょっとした愉快さとか快適さ、あるいは幸せ感というふうに言っているのかもしれませんが、そういったものに差を生じさせる。こういうところに、どうやら関西特有の笑いの特徴というのがあるのではないかなということが、これら一連の調査結果から分かります。

考察

以上の結果について、もう少し別の観点から考察してみたいと思います。最初の方で少し触れましたが、笑うと心身共に健康になるというようなことが言われています。実は、これが果たしてどれくらい的確な主張なのかについては少々微妙です。実際、笑うと免疫力が高まったり、心身共に健康になったりするという結果を示す研究は少なくありません。こういったテーマについてさまざまにおこなわれた研究を精査した研究者がいます。アメリカ人のとても高名な、マーティン（Martin, 2001）というユーモア研究者です。彼のレビューによると、笑いが健康に及ぼす影響は、多くの人が信じているほど強くはないようです。笑う人のほうが笑わない人よりも、わずかに健康であるという程度にとどまるようです。それでもやはり、よく笑う人というのは、笑わない人よりもわずかではあるけれども、心身共に健康だということです。

ところで、関西人が他の地域の人よりもよく笑うかについてもデータを分析してみましたが、地域の差はありませんでした。しかし、先ほどお示ししたように、周囲に笑う人がたくさんいるかどうかと快感情との関連については関西とそれ以外の地域とで差が見られます。つまり、関西に住む人たちにとって、日々快適に過ごせるかどうかの程度が、周囲に笑わせる人が多いかそうでないかで変わってくるということです。

こういったところから、先ほど社会学や歴史学などで検証されている、大阪を中心とする関西。いや失礼。大阪が関西の中心と言うと、他の地域の人は怒りますけれどもね。特に京都の人なんか



ね。ごめんなさいね。京都の関係の方がいらっしゃったら、ごめんなさい。わりと、京都の方が中心やという人が多かったりするでしょう。大阪に対しても厳しいのですが、滋賀県にも厳しいですよ。ね。「琵琶湖県」とかと言ったりしてね。そうすると滋賀県の人は怒るんです。「そんなことを言うたら、琵琶湖の水、止めたるぞ」とか言うてね。

でも皆さん、ご存じですか。琵琶湖の水が止まったら大変なことになるそうですね。もちろん京都、大阪には水が来ませんよね。でもそれだけではないのです。「琵琶湖の水、止めたるぞ」と言われたら、「おう、止めてください」と言い返せばいいらしいです。何と琵琶湖水を止めたら、水位が80メートル上がるらしいですね。そうすると滋賀県の市街地は水没してしまうらしいです。

ちょっと話がずれましたけれども、要するに、大阪をはじめとする関西では、どうやら人を笑わせる文化的に決まり切ったやり取りというものがある、それ故に、われわれは自分が持っている資源、経済的な資源の多寡とか孤独感の高低とかに関係なく、笑う。ある意味、これはおそらく関西に住む人間にとってもとても良いことではないかと思います。特に、笑いがわずかではあっても人を健康にするのであれば、自分の中にある心の余裕がなくても、周囲の人たちが笑わせてくれる関西の対人的な環境は、とても望ましいものだとと言えるのではないかというのが、今回、一連の調査をして、私が得た感触です。

私の話は以上でございます。ありがとうございました。

引用文献

- Hurley, M. M., Dennett, D. C., & Adams, R. B. (2011). *Inside jokes: Using humor to reverse-engineer the mind*. MIT press. (片岡宏仁 (訳) (2015). ヒトはなぜ笑うのかーユーモアが存在する理由ー. 勁草書房)
- Martin, R. A. (2001). Humor, laughter, and physical health methodological issues and research findings. *Psychological bulletin*, 127, 504-519.

大阪の笑いと文化

追手門学院大学笑学研究所客員研究員 広瀬 依子

皆さま、こんばんは。広瀬依子でございます。お越しくださしまして、本当にありがとうございます。今日は「大阪の文化と笑い」というテーマでお話をさせていただきますが、最後の10分ほど、映像も見ていただきます。懐かしいと思われる漫才師さんの映像です。よろしくお願いいたします。

さて、先ほど浦先生がお話されましたが、関西の大方の人は笑う。そして、笑うことで幸福度というか、快感が増すということでした。やはり地域によって特性というものがいろいろありますよね。特に大阪には、よく知られている特性がいくつかあります。

まずは、気さくということ。人と人との垣根が低いんですね。

それから、安く買い物ができることを自慢する。先日、私もある人に声をかけられました。「いやあ、ええTシャツ来てるやん。よう似合うてるわ」。そこで思わず言いました。「これ、イオンで1000円で買ったんですよ!」。ありがとうございます前に安く買ったことを口にしてしまう。これはもう、意識に何かがすりこまれているのかではないかと思っています。

そして、何といっても笑うこと、笑わせること。こういう人が大阪では人気を集めます。はるか以前の私の小学生時代もそうでした。今の子どもたちもそうではないかと思いますが、勉強ができる子よりも、スポーツが得意な子よりも、面白い子がクラスの人気者になるんです。これは大阪の大きな特性です。

どうしてこのようになったかを考えますと、社会の成り立ちと関連が深いと言えるでしょう。これは、浦先生の商都大阪のお話に通じます。江戸時代に入り平和が訪れた18世紀初め、大阪の人口は約40万人です。そのうち武士は約4000人。全体の1%です。ところが江戸では人口約100万人のうち武家は約50万人、全体の約半数なんです。將軍家のお膝元ということもありますが、大阪とは町の雰囲気が全然違うわけです。

大阪にはご存じのとおり、大阪城があります。でも、江戸時代の大阪城主、つまりお殿さんは誰? と言ったらどうでしょう。思い浮かばないのではないのでしょうか。大阪城といえば太閤さんであり、豊臣家のお城だと私たちはずっと思っている。それも当然で、江戸時代の大阪は幕府の直轄地でした。ですから、城主は將軍で、ふだんは大阪城代という役割の人が数年交代で城を預かっ



ていたわけです。今でいえば、江戸幕府株式会社大阪支社長のようなものですね。だから大阪の人びとにとってはあまり馴染みがないわけです。たとえば熊本城ですと「清正公さん」などと呼んで、城主を今も誇りにしていますが、大阪にはそれがない。

大阪では武士に接する機会が少なく、圧倒的な町人社会だったわけです。個々のお付き合いの上で、もちろん年齢や立場などで相手に敬意を払いますが、町人という範疇ではみんな一緒。横のつながりでできている社会でした。

そして大阪の町人には、商売に携わっている人が多かった。「天下の台所」という言葉をお聞きになったことがあると思いますが、たくさんの人や物が集まってきました。食料品も来れば雑貨も来る、各地の物産品も来る。当時は飛行機やトラックはありませんから、主な輸送手段は船です。その船の荷を降ろしてもらった後、空っぽで帰るのはもったいない。そこで大阪の品物を積んで、いろんな地域に持って帰る。東北や北陸から来た「北前船」が有名です。そうすると商いも發展します。

いろんなところからいろんな人がやってくるということは、習慣の違う地域の人たちと接するわけですから。コミュニケーションを取らないと、ものごとがうまく進まない。コミュニケーションの取り方には、しぐさや言葉など、いろいろあります。一番わかりやすくして人の心をほぐすのは笑い、笑顔ですね。ニコッと笑いかけられて、嫌な気分になる人は誰もいません。それどころか、こちらでも思わず笑顔を返す。自然とお互いの距離が縮まる。そういうことが大阪では自然に行われるようになりました。

また、大阪人はこのような遠来の人を歓迎しました。商売を盛んにしてくれる相手ですから当然です。「おのぼりさん」という言葉は、大阪ではほとんど使いません。「おのぼりさん」は、他地域から東京へ出かけていった人のことを指しますが、東京が他地域より優位であるような印象を与えます。余談ですが、江戸時代は実は関西から江戸へ行くことを「東下り」と呼んでいました。上るのではなく下る。というのは、京都には皇室がありましたから、その土地を起点にして見ていたのです。

多様な人びとがやってくるまち、大阪。笑顔が言葉のないコミュニケーションだとすれば、言葉を使ったコミュニケーションももちろん必要です。大阪には、相手を傷つけないようにする言い回しが多いのも、そのあらわれです。たとえば、何かを頼まれたり誘われたりした時。気が進まへんなあ、お断りしたいなあと思ったら「考えときます」。逆にこちらが急いでものを頼みたい時、「急いで急かんねんけど」と添える。急いでいるのかいないのか、どちらかよくわからない。このように、どっちやねん、という言葉が大阪弁には他にもいくつかあります。夏、ものすごい炎天下で「暑い暑い」。これは暑いことをあらわすのですね。

これらは曖昧な言葉とも言えますが、曖昧という意味では、おもしろい例があります。ずいぶん昔ですが、大阪へ初めて来た人が、電車に乗るのにまごまごしていた。駅員さんに「この電車は、どこどこへ行きますか」と尋ねたら、駅員さんの答が「行きます」。「す」なのか「せん」なのか、ど



っちかわからない。正解は「す」です。これは曖昧というよりは省略に入るかもしれませんが、大阪の中ではこれが受け入れられ、暗黙の了解になっています。

私も何度も経験があります。洋服や靴や鞆などを買う時のことです。いくつか見て決めたいので、何軒かまわります。3軒目ぐらいで、いいなと思ったものに出会ったとします。予算内で、デザインも気に入った。けれども、他の店にもっといいものがあるかもしれない。そこで「ちょっと考えます」「また来ます」と言って店を出る。さらに2〜3軒見た後、やっぱり先ほどのものを買おうと再びお店に行くと、店員さんが「いやあ、ほんまに戻ってきてくれはったんですね」。つまり、「ちょっと考えます」「また来ます」はお断わりの返事だと受け止める人が関西には多いんですね。

小売店と買物客のやり取りは、単に必要なことだけを話すのではなく、コミュニケーションのひとつとすることができます。販売する方は、この人はどういう商品を求めているのか、どんな色が好みなのか、予算はどれぐらいなのか、ということをお客さんとの会話の中で探っていく。でも、聞き過ぎてはいけない。ここが難しいところです。初めてのお店に行くと、よく「このあたりにはよく買い物に来られるんですか」「お仕事の帰りですか」「今日はお休みですか」などと聞かれます。これは普通です。でも「何のお仕事をされているんですか」「紙袋を提げていらっしゃいますが、何を買われたんですか」までいくと、踏み込み過ぎになります。

「商は笑なり」という言葉がありますが、笑って商売をしたら、みんな楽しい。売る人は、もちろん利益が上がって嬉しい。自分の店を気に入ってくれて通ってもらえるのも嬉しい。買う方も、楽しく買い物ができたら嬉しい。せっかく買うんやったらあのお店で買いたいなあ、楽しいし、と思いますよね。それが笑うことにつながってくる。

一方の江戸は武家社会ですから、身分がはっきりしています。垣根も崩しようがない。特に平和な時代は、武士は武張っていないと体面が保てません。戦国時代のように合戦ばかりだと、戦って強いところを見せればいいわけですが、平和な江戸時代には実際に刀を使ったり鎧兜を着けることもあまりない。そうすると、どうしても形式を重んじる。武士としての形を作っていかなければならないわけです。

当時言われたのが「武士は3年に片えくぼ」。武士は3年の間に、片方のほっぺたがちょっとへこむ程度に笑えばじゅうぶんだということです。それぐらいしか笑わない。武士にしてみれば、あんまりニコニコしていると値打ちが下がる、そんな心持ちでした。家族の人たちも、武家の者として自分を律して振舞わねばなりません。ですから、武家中心のタテ社会であった江戸では、大阪のように笑いの発達は見られませんでした。逆に言いますと、大阪で笑いが発達していったのは必然なんです。それも、人を傷つけるのではなく、楽しんだり楽しませたりする笑いです。

言葉遊びを比べてみてもよくわかります。東京で使われる「その手は桑名の焼きはまぐり」は「その手は食わない」と「桑名」をかけている。そして、桑名名産の焼きはまぐりを最後に持ってくる。「驚き桃の木山椒の木」は、最後の「き」という音を揃える。「恐れ入谷の鬼子母神」は、江戸言葉の「恐れ入りやす」と鬼子母神のある入谷をかけている。これらは語呂の良さを活かしたも



のですから、聞けばすぐわかります。

ところが大阪の場合は、ちょっと考えて、ああそうか、とわかる。例えば「金槌の川流れ」。金槌は頭の部分が重いのですから、川へ入れると当然頭の部分が下へ下がる。ですから、頭が上がらんという意味です。「ウサギの逆立ち」は、耳が痛いこと。ウサギのあの耳で逆立ちをしたら、さぞ痛いでしょう。「郵便屋のカバン」というのもありまして、大口をたたくことです。昔の郵便配達の方は、口の大きなカバンに郵便物を詰めていましたよね。そこから来ています。ちょっと考えて、そうか、とわかる。そこで言った人と言われた人との間にコミュニケーションが生まれるわけですね。爆笑ではないけれども、クスリとする、ニヤツとする。そして笑いを共有することで親近感が生まれます。

こういう地域性を持つ大阪では、芸能も笑いの要素を持つものが発展しました。よく知られているのは、落語、漫才、喜劇でしょう。落語は、今の落語の祖先というべき人たちが江戸時代に登場しています。示し合わせたわけではないのですが、京都に露の五郎兵衛、大阪に米澤彦八、江戸に鹿野武左衛門と、3か所にはほぼ同じ時期でした。上方落語協会では毎年1回、大阪の生國魂神社でファン感謝イベント「彦八まつり」を開いていますが、この名は米澤彦八にちなんでいるのです。

大阪の落語と京都の落語は厳密にいうと分けられますが、上方という観点でくくると共通点があります。まずは神社やお寺の境内、広場といったような野外で始まっていることです。屋外ということは、道行く人たちの足を止めて、ひきつけないといけない。寄席小屋のような閉じられた空間ですと、お客さんはいったん座ると、そのまま聞いてくれます。でも、往来であれば、近付いてきやすいけれども立ち去るのも簡単。帰ろうかなと思っている人の足を止めるには、笑いをたくさん盛り込むのは効果的です。また、人びとがドッと笑っている傍を偶然通ると、その気はなかったけれど、ちょっと覗いてみようかなという気になりますよね。

また、はめものと呼ばれるお囃子を囃の途中に入れるのも特徴です。三味線、笛、鉦などで賑やかに演出します。今は東京でもはめものを入れますが、以前は上方だけでした。これも野外で行われていたことの名残です。人びとの注目を集める効果がありました。

注目を集めるといえば、上方の落語家は着物の色も鮮やかです。赤、ピンクなども着こなします。明るい色は野外で遠くから見てもすぐわかりますし、見た目にも楽しいものです。東京では、紺、こげ茶などの渋めの色が主流です。というのは、東京落語は座敷芸として始まりました。座敷ということは、呼んでくれるお客さんがいる。そのお客さんより派手なものを着るのは気がひける。けれどもボロボロの衣装ではいけない、と控えめな着物が主流になりました。

かんじんの笑いの部分で言いますと、上方落語は爆笑物が好まれます。関西のお客さんは、落語には必ず笑いがあると思っていられっしゃる方が多いのですが、必ずしもそうではない。特に江戸では人情囃の「芝浜」とか怪談の「牡丹燈籠」とか、笑いも入っているけれども物語を楽しもうという囃にも人気があります。

それから喜劇では、今、定期的に公演を行っているのは松竹新喜劇と吉本新喜劇です。以前は東



宝系の喜劇劇団やテレビコメディもあり、「番頭はんと丁稚どん」「やりくりアパート」などをご覧になった方もいらっしゃるかもしれませんが、今は定期的な放送や上演はほとんどない状態です。比較的小規模で喜劇を上演しているところもありますが、ある程度の規模となると、松竹新喜劇と吉本新喜劇がよく知られています。

松竹新喜劇は、曾我廼家劇というお芝居が源流です。もともと歌舞伎俳優だった曾我廼家五郎、曾我廼家十郎という2人が作り上げました。ここを源にたくさんの喜劇劇団や集団ができ、離合集散を繰り返し、戦後、松竹新喜劇に収斂していきます。

先代の渋谷天外さんと藤山寛美さんがいらした頃の松竹新喜劇を覚えていらっしゃる方も多いでしょう。寛美さん時代には、本拠地の道頓堀・中座で244か月連続公演を行いました。18年半です。当時の松竹新喜劇は基本的にひと月公演ですから、18年半、ずっと公演していたわけです。大阪の人びとがいかに喜劇を求めていたかがわかります。

藤山寛美さんが亡くなった時、私が購読していた新聞では、朝刊の1面左肩に大きく掲載されました。芸能担当の新聞記者に聞くと、1面に計報が載るにはある程度の基準があるそうです。芸能人なら人間国宝、文化勲章受章者、文化功労者、それに準じるような功績を挙げた方などです。新聞の1面右側はトップニュースで、左側は二番目のニュース。ですから、寛美さん死去は大阪にとってどれだけ大きなことだったかがわかります。

先ほど申しましたように、松竹新喜劇は歌舞伎俳優が源流ですから、物語性で見せていくのが主流です。公演場所も劇場です。一方の吉本新喜劇は寄席で上演していることもあり、演芸との距離が非常に近い。例えば元漫才師で後に吉本新喜劇の俳優になったという方はたくさんいらっしゃいます。役者さんが定番ギャグを持っているのも演芸に近い。そのギャグを言うことで、お客さんが喜ぶのです。

また、役名が芸名と基本的に同じです。全く同じでなくても、井上竜夫さんのおじいさんは「竜じい」、辻本茂雄さんのおじいさんは「茂じい」など、つながっている。こういう作り方は、演じ手が役と自分の間を行ったり来たりできます。

その点で共通しているのは漫才です。漫才はもともと「万歳」と書きます。扇を持って舞う太夫という役割と、鼓を持って面白いことを言う才蔵という役割。この2人が1組になって、音曲とともに新年や新築等のお祝いをする内容を中心に行っていました。鼓を持っていた漫才師の砂川捨丸さんは、この万歳を取り入れていらしたのですね。

漫才も芸名と役名の間を行き来します。芸名で世間話のようなことをするかと思えば途中で設定が変わることがあります。あなたは先生、私は生徒になって、ちょっとやってみましょう、という感じです。でも、その話題が終わると、また元の芸名に戻る。だから、漫才とコントは違います。コントは初めから終わりまで役名です。

漫才ではスポーツ、家族、食べ物など、身近な話を取り上げることが多いですね。2人の人間が一見雑談でありながら、それらのおしゃべりを笑いを主にした芸として確立させていく。江戸時代



から続く豊かなコミュニケーション能力を身につけていた大阪人は、そういう手腕を持っていた。

これらは「しゃべくり漫才」と呼ばれます。作り出したのは、上方漫才の父と言われる秋田実さんです。ご自身で台本を書かれる漫才師の方も多くいらっしゃいますが、秋田さんは漫才作家という立場を確立、会話だけで進行させる笑いを創造されたのです。後のディスカッションコーナーにご登場いただく漫才作家の藤田曜先生は、秋田先生のお孫さんです。

その秋田さんが心がけられたのは、家族の誰もが安心して笑える笑いです。ブラックな笑いも時にはいいのですが、やはり皆が安心して笑えること。そういう漫才を作られました。みんなが共感できるということは、誰も嫌な気持ちになりません。

では、せっかくの機会ですので、藤田先生の書かれた作品の映像をこれから上映いたします。皆様、一緒に拝見しましょう。演じられるのは夢路いとしさん、喜味こいしさんです。先年亡くなりましたが、多くのファンを持つ漫才師さんでした。また、秋田先生と何度も一緒に仕事をされ、たくさんの作品を上演してこられました。おじいさまとお孫さん、両方の作品を演じられたというわけです。

それでは、藤田先生作の漫才「ファーストフード初体験」をご覧くださいましょう。

(ビデオ上映)

ありがとうございました。いかがでしたでしょうか。私も講師の立場を忘れて、すっかり笑ってしまいました。本当にみんなが共感できる漫才で、おじいさまから続く系譜を感じます。

先ほども申しましたが、ブラックな笑いもあっていいと思うのです。社会への批評、批判は必要です。ただ、基本の楽しい笑いがあるからこそ、ブラックな笑いも面白いということは、忘れてはいけないのではないのでしょうか。

このように楽しく、皆が共感できる笑いを作って下さった秋田実さん。そういう方を生み出したのは、大阪の風土と密接に関連しているのです。今日お越しくださった皆様は笑いのお好きな方ばかりだと思います。どうぞこれからも笑いを大切に、楽しい日々を過ごして下さい、嬉しい限りです。

関西の笑い

ーパネルディスカッションー

ゲストパネリスト：藤田 曜 氏

パネリスト：浦 光博

広瀬 依子

コーディネーター：横田 修

○コーディネーター これからパネルディスカッションを「関西の笑い」というテーマで始めさせていただきますと思います。

本日のゲストは、おじいさまが秋田実氏ということで、先ほど広瀬先生からご紹介がありました藤田曜さんです。研究員の浦光博先生と広瀬依子先生にもご参加いただきます。

さて。関西の笑いということで、どのあたりから入らせていただこうかと。新参者の東下りなものですから、関西の笑いについて、知らないことがたくさんあるのですが、まず、恥ずかしながら秋田実さんを存じ上げません。秋田実さんをご存じの方、よろしければ・・・（客席に挙手を促す）おう、すごい。

○藤田 ありがとうございます。

○コーディネーター ほぼ100%ですね。

○広瀬 秋田実先生は、実はNHKの朝ドラのモデルにもなられたんですね。『心はいつもラムネ色』です。もしかしたら見たという方がいらっしゃるかもしれません。

○コーディネーター ご覧になった方、いらっしゃるようですか（客席に挙手を促す）。あっ、結構挙がりますね。

○藤田 うれしいですね。

○広瀬 プチ情報でした。

○コーディネーター 上方漫才の父だということで、いろいろな文献等にもお名前は沢山出てきます。藤田さんは、「笑の会」という、確かお笑いの会のようなものに所属されていますよね。

○藤田 はい。そうです。

○コーディネーター その「笑の会」というのも、秋田実氏がおつくりになった会だとか。漫才作家として、何か影響は受けていますか？

○藤田 まず、秋田実という名前は、たぶん皆さんのほうが知っていると思うんですね。祖父が、



亡くなったのが1977年なんです。僕は3歳なんですよ。ぶっちゃけて言いますと、おじいちゃんについてというのは本当にもう、いつも言っているのですが、ワンシーンしかなくて、みたらし団子を持って食べているシーンしか僕は覚えてないんですね。3歳で。

中学校か小学校のときに、なぜかNHKの収録現場に行って、藤谷美和子さんという女優の方がいて、何でここに僕はいるんだろうとずっと思っていたんですね。後々、この業界は僕が21か22歳のときぐらいに入ったんですけども、そのときに教えていただいたのは「笑の会」の先生であったり、あと、芸人さんから「うちのおじいちゃんがこういう人だったよ」というのを後で教えてもらったという情報の方が多いんですね。だから、実際は3歳ぐらいで、おじいちゃんは孫に全部色紙に名前を書いていたそうなんですね。生まれたら何か教訓みたいなのを。ただ、僕だけ、もうなかったんですね。要は、親類の中でも一番下なんですよ。そのときに、もう祖父の体の調子もあり良くなかったんで、そういう色紙もなく、僕だけ、ちょっとはみ出した感じになっていたんです。記憶がなく、他の親戚のいとことかはみんな思い出はあるのですが、実は僕はもうまったくないと。なのに、こういう業界に入ったというのが、ちょっと自分でも何でかなというぐらい不思議に思っているときがあります。

○コーディネーター なるほど。本当に、3歳では仕方ないですよ。

○藤田 そうですね。3歳では本当に何も覚えていなくて、お葬式も実は出ていなくて、後々、預けられた人がちょっとよそ行きの格好をして、こっそり連れていってくれたというのは後で近所のおばちゃんに教えてもらったのですが、それぐらい本当に思い出というか、記憶が全然ないんですね。

それで、さっき、「笑の会」と言われたところでいうと、実はこれもちっとお話がありまして、もともと僕は、父親がアウトドアのそういうキャンプとかをやっているんで、アウトドアのほうで、椎名誠さんという作家さんがいらっしゃるんですけども、ああいうのにちょっと憧れていたときだったんですね。

それで、大学に行っているときに、母親が。母親は童話を書いているんですね。その母親が先ほど出ました「笑の会」。うちのおじいちゃんがつくって、一時休止していたんですけども、あらためて読売テレビが漫才作家を育成するという場をつくろうと。演芸のプロデューサーの方の有川さんという方がいらっしゃいまして、その人にもう一度立ち上げていただいて、そこは作家とプロの芸人が一緒にネタをつくって行って、学んで大きくなっていこうというような会なのですが、そこで初めて母親のほうに応募したんです。新聞に載っていて、応募を出したんです。

その出す前に、僕に「この台本を書いたんやけど、どうや」と言われまして、僕から見れば母親の書いたお笑いなんて面白いわけがないんですよ。「面白くないよ」と。

○コーディネーター すごく大事なところですよ。

○藤田 はい。言ったら、「あんた、書いてみいや」と。やっぱり童話作家をしていますから、プライドがあるんですね。「書いてみいや」と言われまして、ちょうど忘れもしないのですが、大学



のテスト中だったのですが、その締め切りが7月10日やったんです。僕の誕生日やったんです。でも、この締め切りをちゃんと守らなければ、今後先も何もうまいこといけへんのちゃうかというぐらいプレッシャーが掛かりまして。

当時、コンビニ、サンチェーンとかいうのができていた時代なのですが、ローソンとサンチェーンというのがあって、そのテーマで台本を書いたら、「笑の会」のメンバーに僕が入れていただいたというところで、母親は関係なく、僕がそこに入って、今に至るということです。

○コーディネーター ありがとうございます。現在、漫才作家として活躍されている藤田さんから見て、東京と大阪の漫才、東京と大阪の笑いの違いとはどの辺りにあると思われますか？

○藤田 やっぱ、東京はコント55号さんとか、てんぷくトリオさん、ドリフターズとか、そういうような、今で言う、売れてはる人で言うウッチャンナンチャンさんとか、バナナマンさんとか、コントが結構多いなと。やっぱりテレビを意識したキャラづくりが非常にうまいなと思うんですね。

逆に、大阪はそういう無理やりキャラ、似合わへんキャラをすると、お客さんのほうが笑いに目が肥えていますので、そんな無理してという形で受け入れてくれないんですね。

だから、大阪はどっちかという、メッセンジャーさんとか、やすよ・ともこさんとか、中川家さんのように、内面の延長線にある笑いを得意としたしゃべくりがあって、もし、台本を東京の人に書くとすれば、やっぱりコントでキャラクターがはっきりして、動いて、顔の表情で笑いが取れるようなネタを書くかなと。

逆に、大阪ではそういうような顔の表情であったり、そういうキャラに入ってというのは、芸人さんらは「ちょっと無理あるわ。これ、やりにくいわ」とよく言われます。その辺の差は、やっぱりちょっとあるのかなと。東京はキャラクターから派生する笑いが得意で、大阪は地の延長。そのものの人の内面の延長で笑いをつくるほうが、爆笑の笑いが取りやすいという気はしますね、違いは。

○コーディネーター まだ関西に越して来て1年半な私は、関西弁で話し掛けてもらう機会が少ないのです。だから、時々関西弁で話し掛けてもらうと、何ともいえない温かい気持ちになります。私が日常で関西の言葉の温もりを実感する瞬間なのですが、今、藤田さんのお話にあった関西の笑いというのは、日常にかなり近いということなのかもしれません。

○藤田 そうですね。漫才コントのときのキャラクターをはっきりと出すというか、あり得ない設定を。大阪では、例えばカフェとかでも、普通やったら、大阪はカフェの中でおばちゃんとかを入れたやり取りのネタを書いたりするのですが、東京の場合はそのままのカフェでいくと受け入れられないというか、テレビ的というか、コントに入っても、イメージとして絵があまりしっくりしないんですね。

そのときに、カフェの前に、例えば、東京は今、マッチョカフェってはやっているんですよ。

○コーディネーター 何ですか。



○藤田 マッチョカフェ。要は、ムキムキの人がカフェをやっているんですね。

○コーディネーター 店員さんがムキムキ。

○藤田 はい。そうです。

○コーディネーター お客様は？

○藤田 お客様はムキムキじゃないです。お客様はムキムキは必要はないので。

○コーディネーター お客様は誰でもいいんですね。

○藤田 はい。店員がムキムキで、こうやりながら、こうやって案内するというのがはやっているのですが、例えばそういうキャラクターであれば、やりやすいですよね。こう筋肉をやりながら、オムレツにケチャップで何か描くときでも、ぐぐぐっとやるところを筋肉を見せながらやるというような、絵の力で笑かしやすいネタがつくりやすいというのは。

ただ、これを、今言ったのは例ですが、マッチョカフェを関西で落とし込んでやろうとしたら「いや、そこまでないやろ。そんなキャラ、要らんやん」と言われるんです。その差というのは、やっぱり東京と大阪の違いなのかなという。「無理やりそんなんでええやん」と言われるんです。「恥ずかしいわ、そんなネタ」と。

だから、通販番組をよく見ていただいたらわかると思うのですが、「へえ、すごいですよねえ」というやつがあるじゃないですか。あれって、大阪のおばちゃんは「うそつけ」と思って見ているんです。

○コーディネーター なるほど。

○藤田 東京は、あれはこのキャラクターを強調させると、それを飲み込んで笑ってくれはるんで



すね。そこって、やっぱりうさんくささというのは、大阪はすぐに見抜くんですね。ぱっと見て。「絶対うそやで、あれ。絶対そんなん落ちるわけないよな」と言って、最後は買うんですけど。

○コーディネーター 結局買うんですか。

○藤田 買うんですよ。「よかったわ」と言うんですけど。

○コーディネーター よかったですね。

○藤田 でも、ただ、そこがたぶん、通販が一番わかりやすいのですが、あのキャラクターは、東京は受け入れてくれるのですが、誇張すれば。ただ、大阪の場合は、芸人さんはあれの「あんなん、うそやんけ」。もう中川家さんとかがネタでやっているネタがあるのですが、見ていただいたらわかるけど、「うそくさいわあ」目線で笑いにしはるんですが、そうしないと、こなしてくれないというか。そこがちょっとあるかなと思うんです。通販が一番わかりやすいと思います。

○コーディネーター 確かに。関東の人間としては、はいはい、と思いながら見ていますね。突っ込むとかじゃなくて、そういうもんだねと思いながら見ていますね。

○藤田 突っ込む。

○コーディネーター でも、やっぱり買うときは買うんですけどね。

○藤田 結局買うんですよ、あれ。

○コーディネーター でも、買うときは買うんですね。

○藤田 はい。

○浦 ちょっと関係ない話ですが、心理学者なものですから、ずっと論争があるんですね。人をつくるのは遺伝か環境かという話があるのですが、先ほどの話を聞いて、やっぱり遺伝の力って強いなど。

○藤田 いえいえ。

○浦 思いましたね。アウトドアをやっていた方が一発で出して、ぼんと通るとというのは、やはり遺伝子の力って偉大だなとあらためて感じているのですが。

○コーディネーター なるほど。

○浦 そんな話はどうでもいいのですが、今の話は本当にとっても腑に落ちましたね。やっぱり大阪は漫才と日常会話が地続きで、そこから離れてしまうと、笑っていても、うそくさく感じてしまうというのは確かにあるなというふうに、あらためて発見したような感じがします。

○コーディネーター はい。地続きなんですね。

○藤田 漫才は、たぶん大阪のは、お客さんに育てられているということが大きいと思います。もちろん、しゃべくり漫才が発展してきた大阪の文化で、お客さんの野次もあったと思うので。

○コーディネーター どうですか、広瀬先生。

○広瀬 私は今まで、そういう環境で育たれたから今の道に進まれたのかなと思い込んでいたの、ちょっと驚きでした。やっぱり仕事を実際に始められると、秋田先生のお孫さんやねと、いろんなところで言われてはるのでしょうね。プレッシャーを感じられることはございませんか。

お母さまが出産されて、まだお子さんが小っちゃい頃のことです。曜さんかどうかはわからないんですけども、まだ本当に赤ん坊で泣いているときに、秋田実先生が家で原稿を書いていらし



た。泣き声が執筆の邪魔にならんかなと思ひ、気を使ってひやひやしていた。そうすると、秋田先生が「かまへん、かまへん。赤ん坊は泣くのが仕事や」とおっしゃったそうです。秋田先生って本当に温かい方なんやなというのがすごく印象に残っています。

○コーディネーター 先程の浦先生の発表でも、関西の人は周りを楽しませる人が多いというお話がありました。秋田氏自身も関西の土地で育ったということが、そのキャリアの背景にあるんでしょうね。

○藤田 そうですね。その「笑の会」というところで、そのときはまだ、入ったときはアウトドアのほうに行きたかったんです。もちろん、アウトドアでも、みんなで山に登ったりというイベントをしたいなというような感じだったんですね。楽しい。

○コーディネーター アウトドアというのはサークル。何ですか。趣味。

○藤田 父親が日本アルプスとか、そういうのに登るのが好きで、よく椎名誠が好きで、キャンプをやったりするので、僕もそれで行ったんですね。将来的にはそういう仕事がいいと思ったのですが、さっき言った「笑の会」に入って台本を書いて、実際に1本採用されたんですね。芸人さんに実際に演じてもらって、僕らは後ろで見えるのですが、お客さんが笑ってくれたんですね。そのときの一番の感触が、笑顔で帰っていくお客さんに対して言わないのですが、「あれ、僕が書いたんですよ」と言いたくなる気持ちが今もずっとあって、続けていられてるのかなと思いますね。

○コーディネーター 分かります。私は演劇を作ることを仕事にしまして、大学でも演劇を中心に教えているのですが、お芝居が終わった後に、「あの人、あのキャラクター大好き！」とか言ってお客さんが俳優のところへ寄って来たりすると、本当は僕が書いたのになーと。何で僕のところに来ないのかなーと冗談で思ったりします。芸能の世界の方、皆さん、あるんじゃないかと思うのですが、その感じですよ。

○藤田 はい、そうです。そうです。

○コーディネーター 最後に、お三方へ是非お聞きしたいことがございます。関西の人は周りを楽しませる人が多いところから、関西の言葉、まさに関西弁のお話なんですけど、私が関西に来てから参加したシンポジウムで伺ったのですが、関西の人は服の値段をよく聞くんですね。「それ、なんぼしたん？」みたいなことを関西の人はちょいちょい聞く。不躰な話に思えるんですが、それは相手を心配してあげてるんだ、みたいなことを聞いたんです。

○藤田 心配。

○コーディネーター 心配。

○コーディネーター そうですか。それは気に掛けてあげてるということだよみたいなことを言っていたんです。これはわかりますか。

○藤田 わからないです。

○広瀬 それはちょっと違うように思います。

○浦 もしかしたら、私はあなたに対して関心を持っているんですよという言葉の表れなのかもし



れないというような意味なのかもしれないですね。

○コーディネーター ああ、なるほど、なるほど。

○浦 べつにそんなことは考えていないですよ。

○藤田 普通に「これ、なんぼなん」と言うね。

○コーディネーター 考えていないんですか。

○藤田 はい。考えていないです。

○浦 それがデフォルト。

○コーディネーター ああ。さっきもちょっとお話がありましたよね。考え過ぎちゃいけないというお話をしていましたよね。

○広瀬 はい。

○コーディネーター 私は、「ぼちぼち行こか」という言葉を聞くと、「どこへ行くんですか?」と必ず言いそうになります。だって「行こか」と言うんだから、それは「どこに?」となるじゃないですか。独り言でも関西の方は行こかとか言うでしょう。他にも、「自分」とかもよく言いますね、関西の人は。「自分、あれやろ」とか。

○藤田 あと、「自分」とかもよく言いますね、関西人は。「自分、あれやろ」と言って勘違いされる。

○広瀬 あ、相手のことをね。

○コーディネーター そうそう。「自分」って言ったから自分でしょう? 何、それって。何で私に向かって「自分」と言うのか。

○浦 愛嬌ですよ。

○藤田・広瀬 愛嬌。

○コーディネーター 愛嬌。ありがとうございます。なるほど。だから、先程の広瀬先生のお話にもあったのですが、関西弁というのは、言葉の厳密な意味を求めるよりも、その場が温かくなって、きちんと商売ができたり、何かしら関係が持てたり、そのぐらいに捉えた方がよい場合があるのでしょね。

○広瀬 全部が全部そうではないんですけども、そういう役割を持つ言葉は結構あるのではないのでしょうか。さっきも申しましたが、「暑い、暑くない」は、どっちやねんという話ですから、深く考えていたら言えないのではないのでしょうか。

○コーディネーター まだこちらへ来て1年半ですが、これからも関西弁や関西の笑いについて勉強させていただきます。以上をもちまして、第2回笑学研究所公開講座、これにてお開きとさせていただきます。どうもありがとうございました。

(終了)



追手門学院大学 第2回 笑学研究所公開講座

笑う門には福来る

テーマ 関西の笑い

開催趣旨

昨年10月1日に設立した「追手門学院大学 笑学研究所」が「笑う門には福来る」を大テーマに掲げて開催する第2回の「公開講座」です。

第1回は「笑いの効用」をテーマにお楽しみいただきましたが、今回は心理学的視点・文化的視点から「関西の笑い」を考える有意義なひと時を共有できれば幸いです。

プログラム

17:00 開演

17:10 講演 笑いの心理学

【講師】 浦 光博 笑学研究所所員

18:00 講演 大阪の笑いとは文化

【講師】 広瀬 依子 元『上方芸能』編集長
笑学研究所客員研究員

19:00 ディスカッション

【ゲストパネリスト】 藤田 曜氏 (漫才作家、お笑いライブを中心に台本制作&映像制作をしながら活躍中、祖父は秋田笑。)

【パネリスト】 広瀬 依子、浦 光博

【コーディネーター】 横田 修 笑学研究所所員



浦 光博



広瀬 依子



藤田 曜氏

日時 2016年12月22日(木) 17:00～19:30 (開場16:30)

会場 茨木市立男女共生センター ローズWAM 地下2階 ワムホール

申し込み方法

FAX: 072-665-5034 または メール: showgaku@otemon.ac.jp ※申込み詳細は、裏面をご覧ください。
※会場にて一時保育がご利用頂けます。ご希望の方は、お申し込み時にお問い合わせください。(一時保育申し込み受付 12月5日まで)

定員150名
参加無料

申し込み先着順
定員になり次第
締め切らせて頂きます。

主催 追手門学院大学
後援 茨木市、茨木市教育委員会

お問い合わせ

追手門学院大学笑学研究所

TEL: 072-641-9723(研究・社会連携課: 平日9:30～18:00)

FAX: 072-665-5034 メール: showgaku@otemon.ac.jp



想像もしなかった自分史がはじまる

追手門学院大学

追手門学院大学生の「笑い」に関する調査・中間報告

笑学研究所所長 高垣 伸博

笑学研究所の目指すべき姿は『教育・文化のグローバル化に対応できるコミュニケーション力を備えた人材育成のための笑いとの融合をめざした、総合的な学術研究所』であり、また、設立方針の中に「笑いを活用した教育プログラムの研究」がある。今年度春学期に開講した「笑学入門」はその一環と言える。(2017 年度春学期も開講)

この「笑学入門」の講師は研究所関係者だけではなく、外部からも招聘してオムニバス形式で行った。因みに今年度の外部講師として桂かい枝氏(落語家)、大池晶氏(漫才作家、NHK 生活笑百科構成)、小佐田定雄氏(落語作家、NHK 上方落語の会司会)、和栗隆史氏(大阪府立金岡高等学校長、放送作家)といった方々にご登壇いただいた。

この授業の目的は学生が「笑い」への理解を深め、その必要性、効用を学びとり、それらを日常に取り込み、コミュニケーション力向上の一助にすることである。当然 15 回の講義で充分であるはずもなく、今後も試行錯誤続けながら、「笑い」を理解しやすく取り込みやすい、より充実した内容にすべく改善を重ね、ひいては「笑いを活用した教育プログラム」の開発に繋がるよう研究してゆくことは言うまでもない。

その足掛かりとして追手門学院大学生を対象に「笑い」に関する意識調査(紙回答によるアンケート 図 1 参照)を実施したのである。

そもそも学生が「笑い」に対してどの程度関心があり、「笑い」というものをどうとらえているのかを把握することは「笑いを活用した教育プログラム」の開発には必要不可欠である。

学生を対象とした「笑い」に関する意識調査を扱った先行研究はいくつかおこなわれておる。例えば『現代の若者の「笑い」に関する実態とその課題』(青砥弘幸: 日本笑い学会論文・笑い学研究 22) や「笑い」を「ユーモア」と読み替えて調査したものもあり(「ユーモアの心理学」上野行良著 サイエンス社 2003)、「笑い」と一言で言ってもその捉え方は広範である。

「笑い」という現象。その誘因は様々であり、それらによる結果としての「笑い」は『正の「笑い」』から負の「笑い」まで様々である。ここで言う『正の「笑い」』とは、「爆笑」や「哄笑」と表現される楽しく心地よい笑いの類を指しており、『負の「笑い」』とは「嘲笑」や「失笑」などを指すと理解していただきたい。

今回は『正の「笑い」』に関する調査を行った。また、その笑いを「コミュニケーションと笑い」



「演芸と笑い」「言葉と笑い」の3つの観点から調査することにした。

実施期間：2016年9月～11月

調査対象：追手門学院大学生 482人（男性238人 女性228人 性別無回答16人）

対象学年：1～4年

この調査結果の詳しい分析については別の機会に報告することにし、本稿では中間報告としていくつかの興味深い結果について述べてゆくが、本文表記で特に説明の無い場合、基本的に5段階回答の4、5の回答を合わせて「当てはまる」、1、2の回答を合わせて「当てはまらない」と理解していただきたい。また3の回答を高群に含めて「どちらかと言えば当てはまる」と表現する場合もあることを断っておく。

前出のアンケートの設問を見ていただいたらわかる通り、最初に「Q1. あなたはよく喋るタイプですか?」「Q2. あなたは大勢の前で喋るのは得意ですか?」を並べた。これは「コミュニケーションと笑い」の観点、つまり「喋る」=「コミュニケーション」と捉え、「喋る」と「笑いへの理解や関心」（笑う、笑わせる、笑わせない）の関係性を明らかにしようという目的からである。

また「よく喋るか否か」という習性が個体独特のものなのか、生まれ育った環境や家庭に影響するのかを確認すべく「Q4. 家族とよく喋りますか?」「Q5. 楽しい家庭ですか?」という問いかけをした。

今回はこの4つの設問に関して報告してゆくことにする。

「Q1. あなたはよく喋るタイプですか?」（表1）に対しては「当てはまる」が224人で全体の46.4%と半数弱を占め、「どちらかと言えば当てはまる」にすると358人と追大生の74%が「よく喋るタイプ」と自認していることがわかった。

表1 Q1. あなたはよく喋るタイプですか?

無口	1	2	3	4	5	よく喋る
	19(3.9%)	105(21.7%)	134(27.7%)	152(31.4%)	72(14.9%)	

また「Q3. 友人とはよく喋りますか?」（表2）では「当てはまる」が360人と全体の約75%を占める結果となった。これは喋る相手を「友人と」に限定したからであろう。

表2 Q3. 友人とはよく喋りますか?

喋らない	1	2	3	4	5	よく喋る
	7(1.4%)	28(5.8%)	87(18.0%)	169(34.9%)	191(39.5%)	

では「Q2. あなたは大勢の前で喋るのは得意ですか?」（表3）となると、「当てはまる」に該当



するのは 91 人と全体の 20% にも届かない。

つまり、普段友人とはよく喋っても、いざとなると人前で喋ることができないという正直な結果となった。この結果は日ごろの学生を観ていれば想像に難くなく、残念ながら頷いてしまわざるを得ない。

表 3 Q2. あなたは大勢の前で喋るのは得意ですか？

苦手	1	2	3	4	5	得意
	144(29.8%)	129(26.7%)	118(24.4%)	66(13.6%)	25(5.2%)	

では、家庭ではどうだろうか。

「Q4. 家族とよく喋りますか？」(表 4) との問いかけに、「当てはまる」は 285 人、全体の約 60% が家族とよく喋るという結果が出た。これは意外というか、微笑ましい結果である。

表 4 Q4. 家族とよく喋りますか？

喋らない	1	2	3	4	5	よく喋る
	23(4.8%)	56(11.6%)	118(24.4%)	149(30.8%)	136(28.1%)	

これに関連して「Q5. 楽しい家庭ですか？」(表 5) との質問でも、「当てはまる」が 297 人 (61.3%) で Q4 とほぼ同数であった。

表 5 Q5. 楽しい家庭ですか？

そうは 思わない	1	2	3	4	5	とても楽しい 家庭だ
	23(4.7%)	53(10.9%)	110(22.7%)	170(35.1%)	127(26.2%)	

では、楽しい家庭なら家族とよく喋るのか「Q4 と Q5」の関係を見てみると (表 6)、両方の 5、つまり「とても楽しい家庭で家族とよく喋る」と回答したのが 91 人で約 19%、これを「当てはまる」に広げてみると全体の約 50%、246 人が楽しい家庭で家族と喋よく喋っているということになる。

サンプル数が 500 人にも満たないので一概には喜べないが、この結果は特筆すべきことではないだろうか。



表6 縦軸「Q4. 家族とよく喋りますか？」横軸「Q5. 楽しい家庭ですか？」

	全体	1. そうは 思わない	2	3	4	5. とても 楽しい家庭だ
1. 喋らない	23	9	12	1	1	0
2	56	9	15	20	10	2
3	118	2	19	61	30	6
4	149	3	6	20	93	27
5. よく喋る	136	0	1	8	35	91

因みに「Q1. あなたはよく喋るタイプですか？」と「Q4. 家族とよく喋りますか？」の関係はどうか。(表7)

表7 縦軸「Q1. あなたはよく喋るタイプですか？」横軸「Q4. 家族とよく喋りますか？」

	全体	1. 喋らない	2	3	4	5. よく喋る
1. 無口	19	8	4	4	0	3
2	105	4	19	30	41	11
3	134	4	12	48	44	26
4	152	3	18	26	48	57
5. よく喋る	72	4	3	10	16	39

「よく喋る」タイプと答えた72人のうち「家族とよく喋る」のは39人、Q1、Q4両方の「当てはまる」を合わせると160人で全体の33%である。つまり追大生の約30%が家族ともよく喋り、自称「喋り」である。この結果をどう見るかは読者にお任せするが、「どちらかと言えば」まで含むと314人、約65%の学生が「家族とよくしゃべり」自称「喋り」の傾向にあると言える。

では「Q1. あなたはよく喋るタイプですか？」と「Q5. 楽しい家庭ですか？」(表8)の場合はどうかと言うと、「よく喋る」と答えた72人のうち「とても楽しい家庭だ」と答えたのは39人で、両方の「当てはまる」を合わせると162人(約33%)、つまり約30%の「よく喋る」学生は「家族とよく喋り楽しい家庭」と認識しているのである。と言うことは「楽しい家庭」で「家族とよく喋る」学生は「よく喋る」ようになる、と結論付けるのは早計だろうか。

表8 縦軸「Q1. あなたはよく喋るタイプですか？」横軸「Q5. 楽しい家庭ですか？」

	全体	1. そうは 思わない	2	3	4	5. とても 楽しい家庭だ
1. 無口	19	8	2	3	3	3
2	105	3	19	27	39	17
3	133	0	12	50	48	23
4	152	8	13	22	65	44
5. よく喋る	72	4	7	8	14	39



最後に「Q 24. なんでも「笑い」にしようとする大阪気質は？」好きか嫌いか（表 9）の結果を示すことにする。

482 人の出身を大阪府下（244 人）とそれ以外（222 人）で比べると、一体どんな結果になるのか（出身地未回答 16 人）、結果は表 9 の通りである。

表 9 Q 24. なんでも「笑い」にしようとする大阪気質は？

嫌い	1	2	3	4	5	大好き
大阪府下	9(3.6%)	25(9.9%)	70(27.8%)	67(26.6%)	80(31.7%)	
大阪府外	12(5.2%)	28(12.1%)	57(24.6%)	77(33.2%)	54(23.3%)	

ではこの詳細を見ていただこう。表 10

表 10 ※愛知県以下 50 音順

	嫌い				大阪人気質		大好き
	1	2	3	4	5		
大阪府	9	25	70	67	80		
兵庫県	2	12	20	28	20		
京都府	3	7	11	14	11		
奈良県	1	1	3	8	4		
和歌山県		1	2	3	1		
滋賀県	3	3	8	12	10		
愛知県			1	1	1		
愛媛県	1		1		1		
茨城県					1		
岡山県				2			
沖縄県	1		1				
熊本県		1					
広島県			2	1	2		
香川県				2			
佐賀県			1				
滋賀道		1					
鹿児島県			1				
静岡県				1			
石川県	1						
千葉県			1				
長野県					1		



鳥取県			1		
東京都				1	1
徳島県				1	
福井県		1			
福岡県				1	
北海道			1		

この結果は本学の学生（回答者）の出身地分布によるものであるので、あまり参考にはならないが、付録として楽しんでいただければ幸いである。

以上、本稿はあくまでも中間報告であることを重ねて断っておく。

今回の設問自体まだまだ検討の余地のあるものが多く、今後さらなる調査研究を重ねることで、近い将来「笑いを活用した教育プログラム」の開発に繋がることを信じつつ報告を終えることにする。



追手門学院大学・笑学研究所「笑いに」に関するアンケート (2016年実施)

このアンケートは、追手門学院大学「笑学研究所」が本学の学生を対象に行う「若者の笑い」に関する意識調査です。「笑う」という行動、「笑わせる」という行為など、円滑なコミュニケーション活動にとって大変重要な要素である「笑い」に関する研究の資料として、またコミュニケーションスキルアップのためのプログラム開発に活かすべく実施しますので、よく考えて回答にご協力ください。

男性	女性	年齢	歳	学部	出身地	都・道・府・県	市
Q1 あなたはよく喋るタイプですか？							
				無口 ☐ 1 ☐ 2 ☐ 3 ☐ 4 ☐ 5 ☐ よく喋る			
Q2 あなたは大勢の前で喋るの得意ですか？							
				苦手 ☐ 1 ☐ 2 ☐ 3 ☐ 4 ☐ 5 ☐ 得意			
Q3 友人とはよく喋りますか？							
				喋らない ☐ 1 ☐ 2 ☐ 3 ☐ 4 ☐ 5 ☐ よく喋る			
Q4 家族とよく喋りますか？							
				喋らない ☐ 1 ☐ 2 ☐ 3 ☐ 4 ☐ 5 ☐ よく喋る			
Q5 楽しい家庭ですか？							
				そうは思わない ☐ 1 ☐ 2 ☐ 3 ☐ 4 ☐ 5 ☐ とても楽しい家庭だ			
Q6 家族を笑わせますか？							
				笑わせない ☐ 1 ☐ 2 ☐ 3 ☐ 4 ☐ 5 ☐ 笑わせる			
Q7 あなたはよく冗談を言うタイプですか？							
				言わない ☐ 1 ☐ 2 ☐ 3 ☐ 4 ☐ 5 ☐ よく言う			
Q8 (Q7で3, 4, 5を選んだ方のみお答えください) Q冗談をいう場合、その場の空気をよく考えますか？							
				考えない ☐ 1 ☐ 2 ☐ 3 ☐ 4 ☐ 5 ☐ よく考える			
Q9 あなた自身はよく笑うタイプですか？							
				笑わない ☐ 1 ☐ 2 ☐ 3 ☐ 4 ☐ 5 ☐ よく笑う			
Q10 (Q9で3, 4, 5を選んだ方のみお答えください) Qどういうときによく笑いますか？なるべく具体的にお答えください							

Q11 あなたは目立ちたがり屋ですか？							
				控えめ ☐ 1 ☐ 2 ☐ 3 ☐ 4 ☐ 5 ☐ 目立ちたがり			
Q12 人を笑わせるのは得意ですか？							
				苦手 ☐ 1 ☐ 2 ☐ 3 ☐ 4 ☐ 5 ☐ 得意			
Q13 (Q12で3, 4, 5を選んだ方のみお答えください) Qあなたは漫才で言うところのタイプですか？							
				ツッコミ ☐ 1 ☐ 2 ☐ 3 ☐ 4 ☐ 5 ☐ ボケ			
Q14 (Q12で1, 2, 3を選んだ方のみお答えください) Qあなたは人を笑わせたいと思いますか？							
				思わない ☐ 1 ☐ 2 ☐ 3 ☐ 4 ☐ 5 ☐ 笑わせたい			
Q15 あなたは人の冗談に対して好意的に笑う方ですか？							
				好意的ではない ☐ 1 ☐ 2 ☐ 3 ☐ 4 ☐ 5 ☐ 好意的			
Q16 あなたは以下に挙げた芸能を授業(過去も含めて)以外で見たことがありますか？							
1. 落語				全くない ☐ 1 ☐ 2 ☐ 3 ☐ 4 ☐ 5 ☐ よくある			
2. 狂言				全くない ☐ 1 ☐ 2 ☐ 3 ☐ 4 ☐ 5 ☐ よくある			
3. 歌舞伎				全くない ☐ 1 ☐ 2 ☐ 3 ☐ 4 ☐ 5 ☐ よくある			
Q17 以下の3つの「笑い」/パターンの中であなたが好きなものはどれですか？(複数回答可)							
1. 一発ギャグ系 2. 音楽ネタ系 3. ダジャレや言葉の掛け合い系							
Q18 あなたは下に挙げた「お笑い」の中でどれが一番好きですか？							
1. 落語 2. 漫才 3. コント 4. ビン芸(一人芸) 5. パラエディー番組 6. 特になし							
Q19 あなたは吉本新喜劇を見ますか？(テレビ、舞台どちらでも可)							
				全く見ない ☐ 1 ☐ 2 ☐ 3 ☐ 4 ☐ 5 ☐ よく見る			
Q20 (Q19で3, 4, 5を選んだ方のみお答えください) Q好きな新喜劇の役者あるいはギャグを具体的にお答えください							

Q21 あなたが好きな「お笑い芸人・タレント」をベスト3を挙げてください							
1. 2. 3.							
Q22 次に挙げた冗談(言葉遊び)のうち、面白いと思ったものに○、理解できたが面白くないものに△、理解できなかったものに×を口の中に記入してください							
1. ☐ ウサギの逆立ちや！(小言を言われたときに使う)→耳が痛い							
2. ☐ ゆがんだ松の木や！(急いでいるときに使う)→走(はし)らにやならぬ							
3. ☐ A「男の子が池にはまったとどんな音がする？」 B「ぼっちゃーん！」							
4. ☐ A「隣の家に園い」ができたで B「へー」							
5. ☐ A「この井戸は深いかな？」 B「ほんのソコまでや」							
Q23 人を笑せられるようになりたい							
				そうは思わない ☐ 1 ☐ 2 ☐ 3 ☐ 4 ☐ 5 ☐ とてもなりたい			
Q24 なんでも「笑い」にしようとする大阪気質は？							
				嫌い ☐ 1 ☐ 2 ☐ 3 ☐ 4 ☐ 5 ☐ 大好き			

ご協力ありがとうございました
追手門学院大学・笑学研究所

図1 アンケート用紙

2016 年度笑学研究所活動記録

2016 年

4 月 8 日～7 月 15 日（金曜 3 限）笑学入門開講（全 15 回）

4 月 8 日 第 1 回所員会議 於：本学研究所

5 月 19 日 第 2 回所員会議 於：本学研究所

6 月 16 日 第 3 回所員会議 於：本学研究所

8 月 4 日 第 1 回研究会 於：本学 4507 教室

・研究発表 瀬沼文彰客員研究員 テーマ「笑いで繋がる若い世代の光と闇」非公開

9 月 8 日 第 4 回所員会議 於：本学 2204 教室

・会議に先立って沼尻准教授（地域創造）による発表

Till Weingärtner *Manzai, Eine japanische Form der Stand-up-Comedy*

10 月 6 日 第 5 回所員会議 於：本学研究所

11 月 17 日 第 6 回所員会議 於：本学研究所

12 月 8 日 第 7 回所員会議 於：本学研究所

12 月 22 日 第 2 回笑学研究所公開講座 於：茨木市立男女共生センターローズ WAM ワムホール

・司会 横田修所員

・挨拶 高垣伸博所長

・講演「笑いの心理学」浦光博所員

・講演「大阪の笑いとは文化」広瀬依子客員研究員

・ディスカッション ゲスト：藤田曜氏（漫才作家）浦、広瀬、横田

2017 年

1 月 19 日 第 8 回所員会議 於：本学研究所

2 月 16 日 第 2 回研究会 於：本学研究棟会議室

・研究発表 大谷邦郎客員研究員 テーマ「障がい者と笑い」非公開

3 月 16 日 第 9 回所員会議 於：本学研究所

2016 年度笑学研究所所員および研究員一覧

【2016 年度】

所 長	高垣 伸博	社会学部教授（マスコミ論、放送演芸論）、笑学研究所初代所長、日本笑い学会顧問
特 別 顧 問	井上 宏	関西大学名誉教授、日本笑い学会初代会長、元・大阪府立上方演芸資料館（「ワッハ上方」）館長
特 別 顧 問	西上 雅章	通天閣観光（株）代表取締役社長、追手門学院大学 客員教授
副 所 長	木村 英樹	社会学部教授（言語学、中国語学）
所 員	浦 光博	心理学部学部長・教授（社会心理学）
所 員	真銅 正宏	図書館・情報メディア部長、国際教養学部教授（日本近代文学）
所 員	横田 修	社会学部 専任講師（演技・演劇論）
客員研究員	大谷 邦郎	グッドニュース情報発信塾塾長、NPO 発達障害を持つ大人の会（DDAC）監事（元・MBS ラジオ報道部長）
客員研究員	瀬沼 文彰	西武文理大学兼任講師、桜美林大学非常勤講師、日本笑い学会理事
客員研究員	広瀬 依子	追手門学院大学非常勤講師、元・雑誌「上方芸能」編集長

※10月1日付で所長交代

追手門学院大学笑学研究所規程

2015 年 9 月 4 日

制定

(設置)

第 1 条 追手門学院大学（以下「本学」という。）に、笑学研究所（以下「研究所」という。）を設置する。

(目的)

第 2 条 研究所は、本学の総合大学としての学問的蓄積を生かし、人類の誇りうる能力であり文化である笑いを対象にした、総合的な学問研究を発展させることを目的とする。

(事業)

第 3 条 研究所は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

- (1) 笑いとユーモアの文化に関する研究
- (2) 笑いを活用した教育プログラムに関する研究
- (3) 上方芸能に関する研究
- (4) 笑いに関する図書及び資料等の情報収集並びに提供に関すること。
- (5) 笑いに関する教材等の編纂並びに出版物の刊行に関すること。
- (6) 研究会および講演会・シンポジウム等の開催
- (7) その他研究所の運営に関すること。

(所長)

第 4 条 研究所に、所長を置く。

- 2 所長は、学長の推薦により常任理事会の議を経て学長が任命する。
- 3 所長は、研究所を代表し、研究所の運営を統括する。
- 4 所長の任期は、4 月 1 日から 2 年間とし、年度の途中で任命された場合は、就任した年度の翌年度の 4 月 1 日から起算して 2 年を経過する日までを任期とする。ただし、再任を妨げない。

(副所長)

第 5 条 研究所に、副所長を置くことができる。

- 2 副所長は、所長の推薦により、学長が任命する。
- 3 副所長は、所長を補佐し、所長に事故あるときは、その職務を代行する。
- 4 副所長の任期は、4 月 1 日から 2 年間とし、年度の途中で任命された場合は、就任した年度の翌年度の 4 月 1 日から起算して 2 年を経過する日までを任期とする。ただし、再任を妨げず、所長の終期を超えることができない。

(所員)

第 6 条 研究所に、所員を置くことができる。

- 2 所員は、大学の専任教職員の中から、第2条の目的を達成するために必要な専門性を有する者を所長が推薦し、学長が委嘱する。ただし、任期は2年とし、再任を妨げない。

(客員研究員)

第7条 研究所に、客員研究員を置くことができる。

- 2 客員研究員は、学外の有識者の中から、第2条の目的を達成するために必要と判断される者を所長が推薦し、学長が委嘱する。ただし、任期は1年とし、再任を妨げない。

(特別顧問)

第8条 研究所に、特別顧問を置くことができる。

- 2 特別顧問は、所長の推薦により学長が任命する。
3 特別顧問は、研究所の事業推進について所長に助言等を与える。

(事務の所管)

第9条 研究所の事務は、教育支援課が行う。

(規程の改廃)

第10条 この規程の改廃は、大学教育研究評議会の議を経て学長が決定する。

附 則

この規程は、2015年10月1日から施行する。

追手門学院大学笑学研究所年報 第2号

2017年3月30日発行

発行者：追手門学院大学笑学研究所

〒567-8502 大阪府茨木市西安威2丁目1番地15号

TEL：072-665-5024

印刷所：協和印刷株式会社

〒615-0052 京都市右京区西院清水町13

TEL：075-312-4010
